水明インターネット句会（選句・選評）　令和五年六月

1		太陽の匂い発する白きシャツ	古賀由美子
2		花水木朝刊で知る師の訃報	檜鼻ことは
3		春の宵風に揺られてブーランコ	池田進歩
4	由美子 朝香	立ちこぎの少年の尻驟雨かな 少年の強い意志が見えます。驟雨の中で思いっきり漕ぐ姿が尻の動きで表現しているのが秀逸。	新井史子
5		コロ柿の粉さえしぶきえん側の雪	仁風
6	ひろし 俳爺	むらさきは母偲ぶ色花菖蒲 紫陽花でしたが私の母もむらさき色が好きでした。紫を入れて上手く詠まれました。	西村青夏
7	修 マスミ 鶴城	早苗饗（さなぶり）の灯りを映す用水路 盛り上がる早苗饗と静寂な用水路の対比が見事。田植えという大仕事を終えての早苗饗。ほっとした気持ち、実りへの祈り。大地への感謝。が伝わって来る。勢いよく流れる用水路もともに宴に参加しているようだ。早苗宴の灯りがすべてを物語っていて、用水路が生きている。	しーしー
8	徹斎	振り向けば前髪揺るる藍浴衣 夏の風物詩が味わい深かった。	立野音思
9	のり子 たか子	七分の一の余生や蝉時雨 余生真っ只中の哀愁が。人生百年とすると作者は八十代半ばであろう。残された時間は刻々と少なくなる。蝉も今は賑やかだが、すぐに静かになる。蝉に人生を重ねた表現が素晴らしい。	衛
10	小麦	満潮の運河眩しく夏兆す キラキラの眩しさを一緒に見ている気がする。	幸子
11	稀香	父の日やわれを起さぬプレゼント 家族の思いやりを感じる句です。	茂樹
12		父の日や生きて賢治の詩の如く	新　暦文
13	光雲2 風舎 六弦	更衣きのふと違ふ風纏ふ 心まで昨日の風をまとうような気がします。一瞬の季感をとらえた佳句である。作者のメリハリの利いた、充実した生活ぶりがうかがわれる。更衣は気分もリセットされますね。	荒一葉
14		士林の薄暑の夜市匂い濃し	河野凡士
15		神様も我も驚く喜雨なりき	反町修

水明インターネット句会（選句・選評）　令和五年六月

16		ミニスカの君の太腿夏野ゆく	森佳月
17		蝙蝠や烏鳴けども帰らぬ児	秋谷風舎
18		金魚鉢揺れる世界に魅せらるる	後記朝香
19		老楽し小庭の梅雨茸つまみ捨つ	高原ひろし
20	山菜 風子	われもまた賞に縁なし太宰の忌 同感同感！太宰も芥川賞に執着したという。太宰が川端康成に芥川賞を懇願したのは有名な話で、自分を太宰になぞらえた所が俳句的。	俳爺
21		新樹濃し雨雲はらふ神の山	しんい
22	俳爺 たか子	短夜や締め切りの刻一刻と 季語と原稿締めとが成功しました。私も同じ様な経験があり、この作品は親しみがあって選句いたしました。	青木鶴城
23	ことは 小麦	白日傘影ごとは入る木陰かな 灼熱の炎天下、影ごと入るの措辞がお見事です。影を作って歩いていても尚大きな影に入る気持ちがよくわかります。	後藤允孝
24	一葉 のり子 俳爺 京子 たか子 六弦 荒	自販機に名水並ぶ街薄暑 〇〇の名水が並ぶ自販機、街は汗ばむ季節である。季語が効いている句。自販機に気づかされるとは、視点が面白い。自販機に冷たい水が並ぶのは確かに薄暑の頃である。「名水」と「街」の意外性が効いています。初夏になり、汗ばむような時節になった。水がほしくなる。いずれの自販機にも〇〇名水との表示がある。季節感を良くとらえた作品である。日本中に名水のなんと多い事か。	本橋稀香
25		梅雨茸やジブリの森のエトランゼ	光雲2
26		水馬も天草四郎もみづのうへ	森下山菜
27		手を振られ旅立つ宿よ山法師	龍野ひろし
28	香里 霜 稀 京子	水無月てふ菓子鋭角に透きとほる 清涼感のある和菓子の姿をよく捉えている。確かに尖っています。老舗和菓子屋さんの店頭でしょうか。季節のお菓子を頂きましょう。	みづる
29		ミニトマト梅雨に負けじと青実着け	清川徹斎
30		紫陽花に色の出できし晴れ間かな	あきひこ

水明インターネット句会（選句・選評）　令和五年六月

31
ことは
あきひこ
道を

荒梅雨や遊具のカバが咆吼す

ユーモラスな措辞に、雨の日の公園もしくは遊園地の情景が浮かびます。怖いような可笑しいようなカバちゃん。季語とカバが効果的。

霜里

32
山菜
美枝子

湯けむりに大三角を辿る夏

露天風呂に浸かって星空を眺めている風景。優雅ですなあ。露天風呂にゆったり浸かっている様子。

石関六弦

33

飛行機も間延びしてゆく藤むしろ

せんり

34
霜里

気象庁の遠泳いかん雨天決行

雨天決行時の可笑しさ。

網野月を

35
風子
美佐枝

改築の玄関二つ夏燕

燕は子に餌を運ぶが、作者は子と同居する為に家を改築する。二世帯住宅に改築？燕の子育てと相まって幸せいっぱい。

丸山マスミ

36
道を

紅花や古布の端切の小銭入れ

季語の斡旋が効いています。

森美枝子

37

老いた身が滋味あるみどり新茶淹れ

寒立馬

38
光雲2

葉漏れ日の光の雫薄暑光

葉洩れ日、ひかり，薄暑光のフレーズがいいですね。

村杉清吉

39

古代蓮時空を越えて清らかに

倉田詩子

40

縁切れぬものに水虫迎へ酒

染谷風子

41
風舎

波の愚痴聞いているのか天の川

爽やかで大きな景だ。愚痴ではなく、作者の喜びか充実感を詠んだにちがいない。

岡本たか子

42
徹斎
茂樹

臍を出し肩出し少女街盛夏

いかにも都会の夏風景という感じ。

木村小麦

43

火玉落つ線香花火闇夜来し

かげろう

44
由美子
あきひこ

子叱れば叱られたふりかき氷

けっこう親思いの子の心理かな。微苦笑しながら子供の成長を思う。「かき氷」がいい味。

小林京子

45
徹斎　寒立馬
小麦　鶴城
ひろし
マスミ
かげろう
茂樹

青竹の器に納め夏料理

涼し気な料理の演出が思い浮かびます。見た目から涼を感じさせる生活の工夫、主婦は大変です。切ったばかりの青竹に盛られた夏料理。いかにも涼し気で風情がある青竹に盛ってあるだけで料理が美味しそう。涼見十分、中身は何かな。青竹の器が効果的。

日髙道を

水明インターネット句会（選句・選評）　令和五年六月

46	のり子 亜耶	初夏やひとり観光バスに乗る こんな夏もあり、です。初夏の浮き足立つ気持ちが過不足なく表現されているように感じます。	檜鼻ことは
47		アロハから見える鎖骨の美しき	古賀由美子
48		辻堂の白粉色のハイビスカス	新井史子
49		吾が妻の美しさ見た笑み浮かび	池田進歩
50		にわか雨にランチ相席鳴子百合	しーしー
51	凡士	さつきまで泳ぎゐし鮎焼かれけり 鮎茶屋の炉端の串焼き、うまそう！	西村青夏
52		イブのイブのイブのイブの今日	仁風
53	寒立馬	朝の風やさしく触るる合歓の花 私の故郷にも合歓の花があり、この句の風情そのものだった。	幸子
54	修	蝉時雨祠を守る大樹かな 蝉時雨の中大樹の緑陰に鎮座する祠が目に浮かぶ。	衛
55	佳月 光雲2 風子 ひろし 凡士 美枝子	ひとつづつ消ゆる思ひ出ソーダ水 ソーダ水の泡は次第になくなってきます。思い出も。ソーダ水の泡のごとく思ひ出も消えてゆくのは寂しい。ソーダ水は青春時代の象徴。私的には“ソーダ水飲めば老いらも恋をする”というところ。炭酸の泡を思いでに重ねて素敵。	立野音思
56	由美子 あきひこ かげろう	真珠めく太る雨つぶ蓮浮葉 浮蓮が美しい。ホントに水滴がまん丸く転びますよね。炭酸の泡とともにいろいろな思い出が消えていく。それは決して悪いことではない。蓮の葉に溜る雨水の美しさが表現されている。	新暦文
57	山菜 美佐枝 マスミ 霜里 風舎	球拾ひで終わる部活や雲の峰 諦めなければエンジェルスからスカウトが来るかも。そんなこともね…でも雲の峰に前向きが窺がえます。折角部活に入ったのに、試合に出られず球拾いで終わってしまった。大きく湧く雲の峰を見ている子。作者の青春時代の一シーンなのか。球拾いであろうと、人生にとって無駄なのもはないと詠んだ。作者の充実感が伝わってくる。	荒一葉
58		とこどきに翅を濡らすぬ川鵜かな	茂樹
59		揺れ動く矢車草や恋心	反町修
60	六弦	溜池にぽつぽつぽつと梅雨に入る 中七での梅雨入りの情景が見事ですね。	森佳月

水明インターネット句会（選句・選評）　令和五年六月

61	ハモニカでフォスター吹く子麦の秋	ことは 荒一葉 朝香	河野凡士
	ハモニカの音にのせた「おおスザンナ、草競馬、故郷人々・・・」、麦の秋の季語の斡旋が秀逸です。聞こえてくる曲は「故郷の人々」か「おおスザンナ」か、麦の実りを迎えた牧歌的風景。上五と中七に素朴さと懐かしさを感じる。季語の斡旋がよい。		
62	終活の話しうとまし端居かな	凡士 亜耶	高原ひろし
	妻からせきたてられているのか？私も同じ。		
63	路地入りてジャスミンの香に噎せ返り		後記朝香
64	ほたる掌に妻の瞳のいとけなし	清吉	俳爺
	奥様の可憐さの表現が見事である。		
65	ヒョウ柄と飴のおばちゃん大南風		秋谷風舎
66	縺れ合ふ蝶につけゆく影二頭		後藤允孝
67	夕風や黒出目金の目の濁り	亜耶	しんい
68	藍甕（あいがめ）の泡の呟き半夏生	荒一葉 清吉 茂樹	光雲2
	藍の葉の発酵を泡の呟きとして見ている職人の目、その時間経過が季語の半夏生で生かされた句。中七の措辞と季語の取り合わせの妙。		
69	うとうとと団扇を落とす拾はねば		森下山菜
70	噴水や意中のお方透けて見ゆ	佳月 暦文	本橋稀香
	噴水が恋心の揺れと響き合って ます。下五の透けて見ゆ、の表現が上手い。		
71	傍惚れの人の所在や夏の夕		青木鶴城
72	暮れ残りあぢさゐのブルーグラデーシ		みづる
73	梅雨の間の晴れ日にゴルフ気も晴れぬ		清川徹斎
74	櫓の音に青葉溶けゆく最上川	枝佐 朝香 美 寒立馬	龍野ひろし
	清々しい舟下り。上五と中七で夏の最上川の美しさが良くされている。中七の措辞がみごと。		
75	恨み言ひとまず畳み衣替え	佳月 道を かげろう	霜里
	衣更えの時にはいろいろと思い出しますね。「ひとまず畳み」が良いですね。何はともあれひとまず衣替えで気分を変えましょう。		

水明インターネット句会（選句・選評）　令和五年六月

76		デジタルの遅れし国よ仏法僧	石関六弦
77		五月雨や博物館の窓大き	あきひこ
78		雨蛙小便面の空見上ぐ	網野月を
79	文清吉	背信の夜明けは苦しレモン水 不倫の予感。様々な状況が想像されて魅力的な句である。	せんり
80		橋桁に掛かる藻屑の梅雨激し	森美枝子
81		歩留まりは約7割の辣韭剥く	寒立馬
82	京子	梅雨入りや神水走る社家の町 梅雨の入りを格調高く詠まれたました。惜しむらくは「梅雨入や」でしょう。	丸山マスミ
83		鈴蘭の香に誘はれ丘を往く	倉田詩子
84	文鶴城	登山帽尾根に二十歳の遭難碑 二十歳で遭難は悲しいけど好きな山に眠れて幸せ。登山帽をかぶった作者が遭難費をしみじみとみている景が浮かぶ。	染谷風子
85	美枝子	校庭の白線模様薄暑かな 日差しに浮かぶ白線が際だっています。	村杉清吉
86		五月闇凝らして見ても闇の中	木村小麦
87	修稀香	スマホ見る顔の照り浮く五月闇 五月闇に浮かぶスマホに照らされた顔が印象的。顔の照り浮くという表現が上手い。	かげろう
88		川に沿ふ闇を深めて星飛べり	岡本たか子
89		五月雨や心の奥の淵深し	日髙道を
90		客間にはゴブラン織とダリアかな	小林京子